

遠回りの三人

とおまわりのさんにな

文:ベンチ

「死ぬ気か？」

不意にそんな声をかけられた少女は、ゆっくりと振り返る。

誰もいないと思っていた病院の屋上。

彼女が振り返った先。そのフェンスの向こうに、黒スーツに黒髪で黒縁メガネをかけた中年の黒い男が、気だるそうに影の差し掛かった黒い壁際に黒に溶け込むように座り込んでいた。

男は気だるそうに座り込んでいるだけで、少女の方を見ようとはしない。彼女に話しかけた後、右手をあごにそえて撫でる仕草をする。

ヒゲも黒いのかと思えば丁寧に剃ってあるようで、わずかなあごの黒みすらみつからなかった。

振り向いた少女の長髪がゆらぐ。赤みがかった空に溶け込んでしまいそうなピンクのパジャマに、その髪がぱらりと垂れる。

振り返った彼女は正面を向いているかのような真っ直ぐさで、男を非難するような口調で言葉を投げかける。

「止めないでください」

「いや、意味わかんないし、別に止めてないけど」

男はというと、やはり気だるそうだ。大して少女に興味がないのか、容姿すらも確認しようとしないうのに、距離の離れた彼女に声が届くようなすっと通る低い声が、はっきりと彼女に返答していた。

「いえ、止めましたよね」

「止めてないです」

「止めたじゃないですか」

「だから止めてないから」

「でも私、止まっていますよ」

「勝手に止まったんだろ」

「いいえ、止めました」

「止めてねえよ！」

二人のなすり合いは、数分間に渡り続いた。後半は、汚い罵詈雑言が飛び交った。

「.....それで、死ぬ気か？」

さんざん互いに傷つけあった後、それをなめ合ったり賞賛しあったりする事もなく、男は結局最初の間答へ戻ることにした。

「やっぱり止めてるじゃないですか」

「あーわかったわかった！ 俺が聞いた、それでお前が止まった、それでいいよ」

男が肩をすくめる。少女は笑みを一瞬だけ浮かべ、すぐに冷たい顔になる。男の気だるさは更に深みを増し、むしろ遠目からみれば、黒い服装と共にその空気そのものが深みを増しているよ

うでもあった。

「死ぬ気は別にいいですよ。ただ、ちょっとだけ」

ほんのちょっとだけ、飛んでみたくて。少女は聞こえないように呟く。

「ああ、ようするに死にたいんじゃないじゃなくて、飛び降りたいだけか。けどな、」

死ぬぞ。男はどうしてもよさげな態度で、はっきりと筋書きの結末を伝えた。

「そうなんですか？」

「見りゃわかる」

「そうですか」

屋上の内側を向いていた少女は、改めて屋上の外側へと向きなおる。そして、両手を水平に広げて静止した。

頭の中におぼろげに出力されるのは、有翼種が大空をまうイメージ。

鳥は空を舞う。きれいな青空を。汚い汚いビル郡を見下ろしながら、薄汚れた雲を飛び越え、優雅に空を行く。

「……鳥なら、ここから簡単に舞い上がっていっちゃうんでしょね」

「ペンギンだったら、鋭い角度で頭から落ちるけどな」

「……さっきから何だか、ひっかかる言い方ばかりですね」

腕をさげ、少女は声の音程を一つ下げた。

「お前がくさい台詞ばかり吐くからだろ」

「死ぬ前はカッコいい台詞はきたいって思ったことはありません？」

やっぱ死にたいんじゃないか。男は悪態を表情だけにとどめる。

「死にたいと思ったことがないからな、そりゃねえわ」

「それじゃあ、死に掛けた時は？」

「ないない」

「なら……」

淡々とした会話だった。少女が独り言のように囁いた質問は風流れて男に届き、その質問を男は自らの身なりのように、黒(じぶんの)色に染めて返す。

さきほどの口喧嘩よりも、やや長めのひと時。

話題は乗り継ぎのように徐々に路線を変え時には脱線し、何度も何度もその工程を塗り替えながらも弾んでいく。

それは不思議な光景で、フェンス越しの屋上の会話というものは、一見してシュールの一言に尽きた。

カッコいい台詞についてであったはずの他愛もない話題は、いつのまにか身の回りの人についてまで発展していた。

仮に二人の会話が止まったりなどしたら、なぜこんな話になったのかすらわからなくなっているだろう。

それくらい、二人の間での言葉の投げかけあいは、小気味良いバウンドを繰り返していた。

「——それですね、その幼馴染の男の子はお寺の息子なんです、すごいバカでやんちゃなんで

すけど、明るくて面白いから子供の頃はよく遊んでたんですよ」

「へえ、そりゃさぞかし楽しい子供時代だったんだろうな」

「そうでもないです。彼いたずらも結構やったから……私の行く先々に先回りして驚かしたりとかがしょっちゅうで、あの頃は嫌だったんです。結局、遊んだのも小学校の四年くらいまでで、後はほとんど。中学校まではメールのやり取りもしてたんですけど……」

少女の口を尖らせつつも楽しそうな言い草が、声だけを聞いている男にも伝わり、彼は口元を緩ませた。

「そのくらいの年齢の男なんてそんなもんさ。何かにつけて気に入ってる相手には、男女関係なしにつっかかるしな」

そうですね、と少女はつぶやく。

「今度、連絡でもとってみたらどうだ」

「いまさら、電話なんて恥ずかしいです」

「お前らくらいの世代なら、メールでもいいだろ。気軽でさ」

「……………」

ふいに会話が止んだのは、そんな投げかけの一幕の後。少女の桃色の衣服が、真っ赤に染まり始めた頃合。

フェンスの向こうから屋上を見る少女と、何も見ようとせず屋上に座り込む黒い男の会話は、久しくして一秒の沈黙を得た。

「なんだ、メールでも恥ずかしいのか？」

「いえ、そろそろ夕方かな、と思って」

「ああ、夕方だな。どうみても。綺麗な夕焼けだ」

「そうですか」

「お前も見ろよ。今日は珍しく雲ひとつないいい天気だったからな、果てしなく真っ赤だ」

少女は屋上の外側へと向きなおる。そして、両手を水平に広げて静止した。頭の中におぼろげに出力されるのは、有翼種が大空をまうイメージ。

雲のない、風だけはそよぐ気持ちのいい夕焼け空の屋上で、少女はただ、青空を舞う鳥のみを空想する。

「……なんだ、あんなに綺麗な夕焼けだからな、くさい台詞も浮かんでこないか？」

「いえ、そういうわけではないんですけど」

ただ、と。

目を瞑ったままの少女は、そうして鳥をひたすら飛行させる。こうして風を感じることもさえできれば、彼女はいつでも鳥を追いかけることができるようだろう。

だが、それは決して無限ではなく有限であり、限りなく限定的で。

目を開けば、彼女の前に広がるのは、

「私、目が見えませんか」

黒い黒い、暗闇だけだった。

「……………」

「くさい身の上話、いいですか？」

両手を下ろす少女。

「聞きたくないな」

未だに微動だにしない男。

「ホント、バカみたいな青臭い話です。中学校ではメールくらいでしか連絡とってなかった圭太と、久しぶりにあったら喧嘩しちゃって。しかもエスカレートして、子供じみた取っ組みあいになっちゃったんです」

男の意見など最初から意味などなく、少女は語る。

少女の問いも最初から意味などなく、男は聞く。

「——それで、目に傷を負って失明したのか」

笑い話にも悲劇にもならない、馬鹿な事故だ。

「はい。ホント……馬鹿です。でも、悪いのは私なんですよ。ていうか、砂を先に投げつけたの私ですし、投げ返されて防ぎもしなかったのも私ですから」

「割り切れる話じゃないだろ、そんな些細な事で失明なんて」

「ええ、そうかもしれませぬね」

「だから、死ぬのか？」

「違います。そうじゃなくて……自分への、罰っていうか」

「罰……？」

「その事で、圭太……あ、幼馴染の子です。圭太の家族と私の親とで一悶着あって」

よくある世間を想像する。責任問題、慰謝料、町というコミュニティから加害をうける加害者。

「そんなつもりはなかったのに。私は別に彼を恨んでいなかったし、嫌いにもならなかった」

むしろ、それでも好きだった。そんな声が、風に紛れて空へと舞い上がっていく。

「その日、寄りを戻そうと思って……その、告白したんです。なのに、圭太は茶化してごまかそうとしたから、私が先に頭にきちゃって」

「年頃の男だ、恥ずかしいものなんていくらでもある」

「嫌いなら嫌いでよかったんです。でも、」

返事くらいは、欲しかったなって。少女は沈み行く夕日と向かい合い、過去の記憶をさかのぼっていく。

顔を真っ赤にした自分。せきを切ったように冗談だ何だと喋りだす彼。怒って泣き叫んだ私。

「返事くらい、欲しかった。でも、私が入院している間に、圭太はどこかへ行っちゃった」

「恥ずかしかったからだ」

「違う、私が追い出したの。私は親に何も言えなかったし、その時は失明の事で頭がいっぱいだったし。何より……誤魔化されたのが、ショックだった気がする」

「だから、死ぬのか？」

何度目の問いか。男は少女にその答えを求めていた。

死ぬのか、死なないのか。

死にたいのか、死ねないのか。

1か、0か。

「私は、死にたいんじゃない。ただ、飛びたいだけ。何もかもわーって叫んで吹き飛ばして、ここから大空へ飛び立ちたい」

「なら、飛べばいい。何がお前を縛り付ける、何がお前をそこに立たせたままにいる」

「何が……？ そんなの、さっきから言っているじゃない」

少女が振り返ると、男はいつのまにか彼女の目の前に立っていた。フェンスを挟んだ向こう側は、近いようで遠い。それでいて、少女の視界には、男は一生届かない。

「返事が、欲しかったの。私は、ただ、彼と……」

仲直り、したかった。中学校になってお互い気恥ずかしくなって、冷やかされるのがなんだかむずがゆくて。それでも、私は一緒にいたかった。

「俺も……」

「え？」

「俺も、陽子が好きだった、今でも、その気持ちは変わってないと思う」

「どうして、私の名前……」

少女——陽子は、手を伸ばした。触れる。冷たい肌触り、ガシャンという音。フェンスの向こうに手を伸ばすことは叶わない。

それでも伸ばす。指だけが境界を越える。それでも、陽子の指先では、男には一生届かない。「ずっと、探してた。遠い町に引っ越してからも、バイトして、金貯めて、何度もこっちへ足を運んだ。中学校を卒業して、すぐにこっちに就職したよ。でも、陽子だけが見つからなかった、君だけが、見つからなかったんだ」

「圭、太……？」

「ずっと会いたかった。ずっと言いたいことがあった。謝りたかったし、返事もしたかったし、俺の思いも伝えたかった。それに、何より」

——仲直り、したかったんだ。圭太は手を伸ばす。ガシャン。男の手も、フェンスを越えることはできない。

それでも、指をからめることくらいは、できた。冷たい感触、フェンスという境界線。二人の手は、これ以上は、届かない。

「けい、た、圭太っ 私も、私も、仲直り、したかった……！」

ガシャン、両手を伸ばす陽子。阻むフェンス。男もまたもう片方を伸ばし、指をからめる。冷たい感触。

「なら、仲直りだ、陽子。何年も、何十年も。今まで、ずっとそうしたかった。そう思ってたんだ」

陽子の叫びに、圭太が答える。

少女のまぶたの奥から、涙が流れた。男は、フェンスごしに、悲痛な顔を浮かべる。

「うん、私も、ずっと、仲直りしたかった。だから、圭太」

「ああ、仲直りしよう……陽子」

どれだけの時間が経ったのかさえ曖昧になるような、黄昏時。

二人は、ささやかな仲直りを約束した。

.....同時に、少女は境界から手を離し、改めて夕陽と対面する。

「今なら、飛べそうな気がする」

「そうか」

男も境界から手を離す。

「なんだか、恥ずかしいところを見せましたね」

「何言ってんだ、俺と陽子の仲だろ」

「あはは、そうですね。ところで、知ってますか」

「何を？」

「圭太、私が失明してから二週間くらい後に屋上から飛び降りて、そのままベッドで寝込んでるんですよ」

「.....」

「でも、ちょっと嬉しかったかな.....」

少女は両手を広げる。目を開くと、暗い暗い夕焼け。光を失った瞳に赤い日が灯り、ピンク色のパジャマは空と同化していく。

夕焼け空に溶けていく陽子は、夕陽と共に巣へと消えていく鳥のようで。

「待っていてくれよ」

圭太は言う。

「お前がどんなに高いところにいっても、俺も後から行くから。だから、待っていてくれ。その時は、今度こそ」

本当に仲直りしよう。遠回りだったけれど、二人の仲を、深めていこう。

男は、少女の背中を。夕陽と同化していく陽子を、目に焼き付ける。

「うん」

そして、陽子は真っ赤な町並みへと、溶け込んでいった。

ガシャン。

「ん.....あら、何してるんですか、こんな所で」

重厚なドアが開いて、屋上へと姿を現したのは看護師の女だった。

夕陽が沈み、暗闇に包まれた屋上に光が灯る。病院名を照らす光でうっすらと外見を残す屋上は、今は静寂に包まれていた。

屋上のフェンス際に立つのは、一人の黒い男。

「いえ、ちょっと、夕陽を見たくて.....」

「ダメですよ、ここは立ち入り禁止になってるんです。.....あなた、まさかとは思いますが、飛び降りようとしてたんじゃ.....」

「死にたいなんて、思ったことはないですよ」

「それじゃあ、心霊スポット巡りですか？」

「例の、飛び降り自殺をした少女の幽霊ですよ」

「全く。困るんですよ、若い子なんか勝手に入り込んできて、縁起でもない。女の子の幽霊なんて出やしませんよ！」

「そうですね、もう、出ないと思います」

「……っ、ほら、早く出てください！」

フェンスの向こう、境界を越えた先。その向こうへ舞い上がった彼女を、もう見るものはいないだろう。

病院では、今日は誰も亡くなっていない。

ガシャン。

年季のある看護婦ぶりで男を病院の裏口から外に追い出すと、看護師の女は院内へと戻っていく。

歩き出した男だったが、ふい屋上を見上げ、少女を夢想する。

「結局、死ぬ気で飛び降りたのかな、あいつは」

「さあ。俺にはわからないぜ、そんな乙女心は」

「仮にも幼馴染だろ、それくらいわかってやれよ」

男は振り返らない。ただ真っ直ぐ闇のみを見つめ、後ろの少年へと意識を向けている。男が飛ばした野次のような茶化しを受けて、幼馴染とやらはへへと笑った。

「まあ、あいつなら本気で飛びたかったのかもしれないけどな」

「そりゃまた結構なことだ。変わった奴だ」

「俺もそうだったんだ、あいつだってそうに決まってる。それに、そこが可愛いんだし」

「惚気話なんか聞きたくはないさ、とっととお前も成仏しろよ、寺の息子」

「悪いな、手間かけさせて。"一昨日死んだばかり"で、お前の身体を借りないと陽子にも見えなかったっぽいし。おかげでやっと仲直りできそうだよ」

「飛び降りた者同士ってか。まさかお前も飛べるだなんて考えてたとは思わなかったけどな」

最高に狂ってる。男は内心でそう呟いた。

「ま、俺の場合も"飛べなかった"けど。俺が"飛んだ"次の日にあいつも"飛び"やがって。こっちの気持ちも察しろっての」

「そりゃ良かったな。お前ら最高にお似合いだ。だから早く行けよ」

「……酷い言いぐさだな、まあ、助かったけどさ。それじゃ、俺もそろそろ先回りかな」

「あん、なんだ、いたずら好きなのはガキだったからじゃなくて、根っからのタチか」

「せいぜい回り込んで驚かせてやるさ。嫌われない程度にだけどな」

ああ、じれったい。男は叫んだ。

「さっさと行け、そんで仲良くあの世行きだ！」

声は夜の空へ溶けていき、男だけが立っている。

改めて静寂に包まれて、男は感慨深いものを得た。それを胸に秘め、両手を広げて。

——みようとしたが、歳なりの世間体や羞恥心からその試みを諦め、結局そのまま歩き出した。

「……それにしても、腹減ったな」

病院の通り添いに評判の良いラーメン屋があるのを思い出し、男はそこへ向かうことにした。

さっさと食べてさっさと帰ろう。そう思っているものの、実はスムーズに帰宅するには、そのラーメン屋は少し遠回りだ。

それでも。

ちょっとくらい遠回りしてでも、今は美味しいものが食べたい。
男は、今そういう気分だった。